

2016 年 GNC モンゴルエコツアー（8 月 31 日～9 月 7 日）報告

1 バヤンチャンドマン村 GNC 苗畑・村内視察

【日時】

2016 年 9 月 1 日 12 : 00～13 : 10

【場所】

トゥブ（中央）県バヤンチャンドマン村

【スタッフ】

宮木いっぺい（GNC Japan 代表）

小川安里（GNC Japan 森林再生部）

オグナー（GNC Mongolia 森林・農場・苗畑担当 男性 29 歳）

サラ（GNC Mongolia 森林・農場・苗畑担当 女性 28 歳）

【参加者】

ノムナ（モンゴル人元在日留学生・東洋大学・女性 23 歳）

ツェンゲル（家畜管理会社経営・男性 37 歳）

1) 苗畑づくり

12 時にバヤンチャンドマン村の GNC Mongolia の苗畑に到着。全体を視察する。スタッフのオーグナーさん、サラさんが成果を説明してくれる。3 年前から育て始めているアカマツの苗木が 2000 本育ち、それらすべてを今年のボルノール村とジャルガランド村の植林に使用した（足りない分は購入した）。昨年視察した際に、最大の敵は、ネズミとのことだったが、予定通り囲いを作って対応していた。また生垣用の木ハイラスとシャルファイスも大きく育っていた。（写真・囲い・生垣用木）。昨年視察した際、チャチャルガンやブルーベリーなどの果実がなる樹木を育てたいとのことだったが、今年はそれを実行し、アカマツの苗畑に隣接した土地で育てられていた。（写真・実のなる植物）。

2) 緑あふれるまちづくり

2010 年にバヤンチャンドマン村の村内緑化を開始し、各家庭の庭に植樹すること、および、環境教育を行うこと、この 2 つをすすめた。これらの取組の象徴として、村内を通るスフバートルからウランバートルをつなぐ幹線道路沿いに、緑地を造成した（写真・石碑）。今年は、バヤンチャンドマン村が出来て 80 周年ということで（写真・看板）、この緑地がさらに整備されていた（写真・緑地）。GNC の活動がバヤンチャンドマン村自身に受け継がれさらなる緑化と繁栄につながっていた。実際、緑地の周辺には店が立ち並び、幹線道路を利用する車が途中立ち寄るスポットとなっていた。これは当初、GNC が描いていた将来像だったので、大変嬉しかった。（写真・店）



バヤンチャンドマン村苗畑で



生け垣用の木、囲い



実のなる木



石碑



80 周年の看板



緑地



お店が並ぶ

2 セレンゲ県 植林地視察

【日時】

2016 年 9 月 1 日

17:40～18:00 (植林地:2004 年秋万博)

2016 年 9 月 2 日

11:10～12:20 (植林地:2015 年春)

12:30～13:40 (植林地:2016 年春)

14:00～14:50 (植林地:2007 年春)

16:30～18:00 (植林地:2012 年春)

18:30～19:10 (植林地:2004 年春)

【場所】

セレンゲ県トジンナルス他

(植林地:2004 年秋万博、2015 年春、2016 年春、2007 年春、2012 年春、2004 年春)

【スタッフ】

宮木いっぺい (GNC Japan 代表)

小川安里 (GNC Japan 森林再生部)

サラ (GNC Mongolia 森林・農場・苗畑担当 女性 28 歳)

【参加者】

ノムナ (モンゴル人元在日留学生・東洋大学・女性 23 歳)

ツェンゲル (家畜管理会社経営・男性 37 歳)

ジャムスラン (元・森林・動物センター長 男性)

1) 森づくり

・2004 年秋万博 (2005 年愛・地球博のプレイベントの際の植林地)

1 日 17 時 40 分に 2004 年秋万博の植林地に到着。今年は春先乾燥していて雨が少なく、植樹した苗木の活着については軒並み苦戦していた昨年と違って、雨が多くよく育っていた。再植林を重ねて何とか維持してきた植林地だったが、ようやく独り立ちしたという印象を持った。





看板前で撮影

・2015 年春、2016 年春、2007 年春、2012 年春、2004 年春の植林地視察

2 日 11 時 10 分に 2015 年の植林地に到着する。この後、2015 年春、2016 年春、2007 年春、2012 年春、2004 年春の植林地を順番に回り、定点観測と樹高の測定を実施した。あいにく小雨模様で足元がぬかるんでおり、靴も靴下も濡れて泥だらけになってしまった。歩きまわる際の体力消耗も例年以上だった。元・森林・動物センター長のジャムスランさんが全行程に同行してくれた。昨年は雨が少なく乾燥していたので木の活着については難しい年だったが、今年は雨が多く活着については順調だった。

昨年 2015 年の植林地の活着率は全体的には 50 パーセントくらいだったが、再植林もなされ全体に順調だった。看板は昨年 3 つのうち 2 つまでがボロボロになっていたが、3 か所とも鉄の看板が新しく設置されていた。全部で 26,5 ヘクタール。日・モ友好の森（緑の募金）は 4 ヘクタール 10000 本。共存の森は 13,5 ヘクタール 32200 本。トライオールのエコフィン生命の森は 9 ヘクタール 22800 本。12 時 20 分過ぎに次に向けて出発。

12 時 30 分過ぎに 2016 年植林地に到着。これまでで最も成功したと言えるほど、ほぼ 100 パーセントの活着率だった。やはり今年の雨が多い天候が良かったのだろう。全部で 20 ヘクタール。日・モ友好の森（緑の募金）は 4 ヘクタール 10000 本。共存の森は 8 ヘクタール 20000 本。トライオールのエコフィン生命の森は 8 ヘクタール 20200 本。日・モ友好の森の看板が遠いところに設置されており、探し出すのに歩きまわり一苦労した。看板は今年は金属製でしっかりと設置されていた。13 時 40 分過ぎに次に向けて出発。

14 時過ぎに 2007 年植林地に到着。金属製の看板は残っていたが、表面がはげていてかろうじて内容が確認できる程度であった。看板のつけかえが必要だ。全体に 2 メートル程度まで成長し、松かさも付けていた。2004 年の後を追う出来栄で小さな森を形成しはじめていた。14 時 50 分過ぎに次に向けて出発。

16 時半過ぎに 2012 年植林地に到着。ここでは定点観測の場所が見つからずに手分けして歩きまわり、体力を相当に消耗した。1 メートル程度に成長しており、概ね順調と言えた。18 時過ぎに次に向けて出発。

18 時半過ぎに 2004 年植林地に到着。ますます成長していた。もはや人工の森とは思え

ない、完全に自然な森を思わせる様子だった。初めて参加したノムナさんは感激の声をあげて写真を撮影しまくっていた。それくらい「森」になっていた。いつものように定点撮影。集合写真。19時10分過ぎに森をあとにする。11時10分からスタートした8時間に及ぶ植林地視察は途中食事をすることもなく、悪路を移動し、植林地では小雨の中歩き回り測定・撮影の連続だったので、これまでのエコツアーの中で体力的に最もハードだった。しかし、概ね順調な成長を確認出来たので満足であった。



2015 年春の植林地

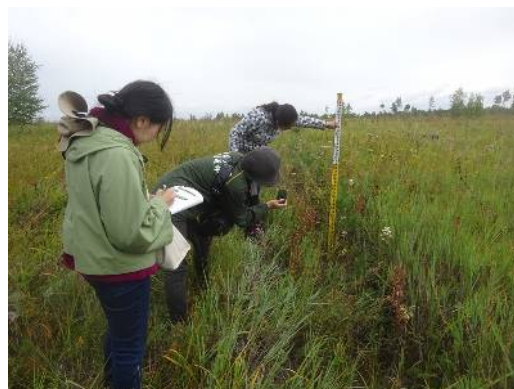




2016 年春の植林地



2007 年春の植林地



2012 年春の植林地



2004 年春の植林地（セレンゲ県で初）看板



2004 年春の植林地はもう立派な森！



ここまで成長しました

3 セレンゲ県 第7幼稚園 花の種・絵本を贈呈

【日時】

2016 年 9 月 3 日 9 : 40 ~ 10 : 00

【場所】

セレンゲ県スフバートル市

【スタッフ】

宮木いっぺい (GNC Japan 代表)

小川安里 (GNC Japan 森林再生部)

サラ (GNC Mongolia 森林・農場・苗畑担当 女性 28歳)

【参加者】

ノムナ (モンゴル人元在日留学生・東洋大学・女性 23歳)

ツェンゲル (家畜管理会社経営・男性 37歳)

1) 人づくり

第7幼稚園に9時40分に到着。4度目の訪問。あいにく日程の都合で今年は、幼稚園は休み。先生が一人わざわざ会いに出てきて下さった。当幼稚園は、150人の園児が6クラスに分かれて在籍している。一番下は2歳か3歳。先生に、花の種と絵本「川のお話」を贈呈する。2011年にはモンゴル全体の学校の中で緑を大切にする1番の学校に選ばれた。2012年にはセレンゲ県で1番、2014年は3番に選ばれている。園内の遊具や花壇なども先生方が工夫して手作り。10時00分に出発。



第7幼稚園の前



絵本と花の種を贈呈

4 ジャルガラント村 植林地視察

【日時】

2016年9月3日 15:50~17:30 (2014年春、2015年春、2016年春)

【場所】

トゥブ (中央) 県ジャルガラント村

【スタッフ】

宮木いっぺい (GNC Japan 代表)

小川安里 (GNC Japan 森林再生部)

サラ (GNC Mongolia 森林・農場・苗畑担当 女性 28 歳)

【参加者】

ノムナ (モンゴル人元在日留学生・東洋大学・女性 23 歳)

ツェンゲル (家畜管理会社経営・男性 37 歳)

15 時過ぎにジャルガラントの植林地近くのバタさんのゲルに到着。バタさん一家は GNC の植林地の管理をしてくれている。バタさんは用事でウランバートルに行っており不在だったが奥さんがいらっしゃった。僕らはちゃんとした昼ごはんを食べていなかったのもので、途中のマーケットで買った食材を渡して料理を頼み、その間植林地をまわることにした。15 時 20 分に出発。

15 時 50 分に 2016 年植林地に到着。森林火災があった場所。岩がごつごつ出ている悪路を 30 分走ってようやく到着した。見晴らしの良い小高い山あいの場所。1 ヘクタール 2500 本のアカマツを 5 月に植えた。雑草が深く生い茂っておりわかりにくかったが、かきわけで見つけるとどれも順調に活着していた。16 時 20 分にバタさんのゲルに向けて出発。



2016 年植林地

バタさんのゲルに 16 時 50 分過ぎに到着。バタさんの奥さんが、スーテーツァイのスープにボーズが入っている料理を作ってくれた。おいしかったしお腹にも優しい。あとヨーグルトをごちそうしてくれる。



その後 17 時 10 分過ぎに、すぐ近くの 2014 年、2015 年、2016 年の植林地を視察。2014 年は生き残ったものを順調に成長しているが、2015 年については、昨年の乾燥が影響して、また 2 年目の苗木ではなく 3 年目の苗木を使ったためか、あまりうまくいっていなかった。また柵が一部壊されていて（おそらく家畜とりわけ牛が体当たりをしていると思われる）、そこから家畜が入り苗の先端部を食べてしまったため、今後の成長は期待できない。2016 年は 1 ヘクタール 2500 本のアカマツ。こちらは、他の植林地同様順調に活着していた。小さいため家畜の被害からも免れていた。家畜対策を含め全体に管理が十分出来ていたとはいえない結果となった。ジャルガラント村は 7000 人くらいの村でバヤンチャンドマンよりだいぶ大きい。かつ緑化について全国で 1 位の村として表彰された実績がある。しかし、モンゴル全体の経済状態が昨今悪くなっており、それに比例するように住民や役場の人の意識は 2 年前より確実に低くなっているように感じる。環境教育の重要性が増しているが、学校もあまり乗り気ではないようだ。17 時半過ぎに出発。



柵が一部壊されている



2016 年の苗は順調

5 ボルノール村 植林地視察&セミナー

【日時】

2016 年 9 月 4 日 12 : 40 ~ 14 : 10

【場所】

トゥブ（中央）県ボルノール村

【スタッフ】

宮木いつぺい（GNC Japan 代表）

小川安里（GNC Japan 森林再生部）

サラ（GNC Mongolia 森林・農場・苗畑担当 女性 28 歳）

【参加者】

ノムナ（モンゴル人元在日留学生・東洋大学・女性 23 歳）

ツェンゲル（家畜管理会社経営・男性 37 歳）

【セミナー参加者】

チンギス（村民・植林管理リーダー・男性・29 歳）

ツオルモン（村民・金鉾管理・男性・37 歳）

バトスフ（村民・男性・25 歳）

【インタビュー協力者】

オーグナー（村民・サービスエリア勤務・女性・24 歳）

1) 森づくり

11 時半にボルノール村における 3 人の植林管理リーダーの 1 人、チンギスさんを家の前でピックアップ。2016 年植林地と一緒に向かった。12 時 40 分に山あいの植林地に到着する。1 ヘクタール 2500 本のアカマツ。ここも他の植林地同様、活着率は良好。雑草のかげに隠れて見つけにくい、元気に育っている。植林地の範囲はピンクの紐を巻きつけた大きな木が目印だ。いつの日かここ一帯が森になる日が来るのだろうか。10 年後が楽しみである。13 時 10 分にセミナーの場所に向けて移動。

2) 人づくり

国土緑化推進機構の緑の募金からの支援を受けた中央県でのプロジェクトが 3 年目（最終年）を迎えた。その成果を総括し今後を展望するために、地元の村民に対してインタビューとセミナーを実施した。植林に熱心な担当者だけでなく、ごく一般の村人にも意見（本音）を聴きたいと思ったので、人選は管理リーダーに加えて一般の村民を選んだ。

まず、オーグナー（村民・サービスエリア勤務・女性・24 歳）さんに植林について質問した。1)ボルノール村で植林をしていることを知っているか、2) 植林に関心があるか。結果は、1) 知らない、2) 関心は無い、とのことであった。この後のセミナーでも確認できたが、これが若い世代の一般的な意見のように思われる。

次に 13 時半から青空のもとでセミナーを実施した。まずは全員に名前と年齢を紙に記入してもらい、写真撮影、簡単な自己紹介を行った。その上で、1) 植林の実施体制、2) GNC に対するメッセージ、3) 今後の展望について、こちらがファシリテートする中で語り合ってもらった。参加者は、チンギス（村民・植林管理リーダー・男性・29 歳）さん、ツオルモン（村民・金鉾管理・男性・37 歳）さん、バトスフ（村民・男性・25 歳）さん。チンギスさんは植林管理リーダーの一人なのできわめて意識が高く、危機感も強かった。あとの 2 人はごく一般的な村民で金鉾管理の仕事、あるいは農牧業を生業としている。まず、チンギスさんからボルノール村における植林体制について説明してもらった上で、2 人の村民から植林に対する意識について意見を聴いた。以下はそのまとめである。

（植林体制）

ボルノール村は人口 5183 人。学校（小中高一貫）が 1 つあり、600 人から 700 人の生徒がいる。幼稚園が 1 つあり、200 人の園児がいる。植林地全体を 3 つに分けて、3 人の植林地管理リーダーがいる。不法伐採や火災が無いかどうかを常にチェックし、活着状態を確

認、植林時には動員した村民に指示を出す。村の学校の教師や病院の職員を含め、全部で200人くらいの村民が植林時には協力する。春と秋に植林する場所は、村民たちで話し合っ
て決める。なお、ボルノール村、および村長から特にこれといった支援は無い。あくまでも
村民の自主的な活動である。

(GNC へのメッセージ)

GNC が支援してくれて心より感謝している。自分たちは幸運である。数ある村の中から自
分たちの村を選んでくれた。自分たちだけでは、植林活動を進めてゆくことは難しかった。

(今後の展望)

全ての村民が植林を継続することに全面的に賛成だと思う。学校では、環境教育を低学
年時には行っており、子供は喜んで楽しんで植林を手伝う。しかし、14 歳くらいになると
あまり関心が無くなる。それどころか、森林に対して被害をもたらすようになる。そこを
改善してゆく必要がある。全体として、昨今モンゴルの経済状況が良くなく環境への意識
が2、3年前（資源バブルで経済が良かった）より低くなっている。

今後、ボルノール村の 7 割を森林にしたい。また植林体制をよい一層強固なものにした
い。地元の森林組合と協力し合って、GNC に引き続き支援してもらって植林を継続したい。
支援がいただけない場合、村民みんなから資金を集めることは難しいかもしれないが、そ
れでもやろうという村民はいる。悲観はしていない。少しずつでもすすめてゆきたい。



ボルノール村の植林地



地元の方々と青空セミナー

6 第 14 回エコ教室の実施

【日時】

2016 年 9 月 6 日 14 : 00 ~ 16 : 00

【場所】

ウランバートル市 モンゴル国立大学エコロジー教育センター

【スタッフ】

宮木いっぺい (GNC Japan 代表)

小川安里 (GNC Japan 森林再生部)

ノヨ (GNC Mongolia 事務局 女性)

【参加者】

ノムナ (モンゴル人元在日留学生・東洋大学・女性 23 歳)

【生徒】

エコロジー教育センター (10 年生 15 歳・16 歳、計 5 名)

54 学校 (7 年生 12 歳・13 歳、計 31 名 + 教員 1 名)

1) 人づくり

12 時 40 分くらいにノヨさんとノムナさんが車で迎えに来る。安里さんはやはり体調が回復せず、僕、宮木が一人で向かうことになる。エコ教室用の紙コップ、試料、文房具、模造紙などを車に積み込む。13 時 20 分過ぎに出発。渋滞に巻き込まれ 13 時 50 分にエコロジー教育センターに到着する。ナサンさんが出迎えてくれる。すぐに会場となる教室でチラシやプリントなど、それに調査道具などのセッティング作業をノヨさん、ノムナさんと 3 人で手際よく行う。6 席くらいのかたまりが 5 つある。14 時 20 分過ぎには参加するエコロジー教育センターの生徒 5 名 (15 歳・16 歳)、54 学校の生徒 31 名 (12 歳・13 歳) と引率の先生 (ゲレルトヤ先生・女性・ノヨさんの高校の同級生) が集まる。14 時半にエコ教室を開始する。

まず、僕が自己紹介および GNC の活動紹介を行う。その際、絵本「川のお話」(生徒全員に進呈した。)の話を皮切りに環境保全の大切さを話し、その後、今回のツアー写真を見せて、GNC の具体的な活動内容を説明した。その後、恒例の水質比較実験をはじめる。パワポを使った説明→水質調査→結果記入→発表→考察という流れ。例年以上に生徒からの質問、意見が続き、時間をマネジメントしたいこちらとしては嬉しい悲鳴だった。この子たちが 3 年後も同じようできて欲しいが、しばしば、高校生くらいの年齢になると環境への関心が薄れてしまうということであった。15 時 45 分から発表がはじまる。そこでもみんなからの質問、意見が次々と出て頼もしかった。その後、川をきれいにするために今後モンゴル人は何をすべきか意見交換を行った。最後は集合写真を撮影して 16 時 20 分終了。



全員集合



最初の挨拶



熱心に聞き入る生徒たち



実験内容・手順の説明



各校ごとに実験作業と発表準備





各校ごとに結果発表



活発な質疑応答



活発な質疑応答



全員で記念撮影

8 モンゴル国立大学エコロジー教育センター会合

【日時】

2016 年 9 月 6 日 17 : 00～17 : 50

【場所】

ウランバートル市 モンゴル国立大学エコロジー教育センター

【スタッフ】

宮木いっぺい (GNC Japan 代表)

小川安里 (GNC Japan 森林再生部)

ノヨ (GNC Mongolia 事務局 女性)

【参加者】

ノムナ (モンゴル人元在日留学生・東洋大学・女性 23 歳)

17 時、校長室に入る。バトツェツェグ校長（女性）は一昨年、昨年と同じ。バトツェツェグ校長は学生時代バザルドルジ先生の教え子で、94 年ごろ東大に留学した経験もある。一昨年はセンター長就任にあたって、ここ 10 年の GNC の活動報告もしっかりまとめてくれていて、GNC との関係性をきちんと理解してくれている。

エコロジー教育センターの生徒は、16 歳から 18 歳。70 パーセントの生徒は、大学に進学する際、環境系に進むとのこと。モンゴルにおける環境分野の未来を背負う人材を送り出している学校だ。モンゴルにおける環境教育の中心を担っている。生徒たちは植林に対する意識も高く、何らかの植林活動に全員が参加しているとのこと。そこと、10 年以上パートナーとして活動してきたことは財産だ。

またエコロジー教育センターが立地しているスフバートル区（ウランバートルの中心街）の高校生 5000 人（もちろんエコロジー教育センターの生徒を含む）が環境の大切さについて学ぶ様々なセミナーや授業に参加する取り組みを実施し、スフバートル区から 100 万 Tg の補助金が得られたそうだ。

今後は、エコロジー教育センターと GNC 双方でアイデアを出し合い連絡を取り合い、エコ教室を高校生用と中学生用に分けて、よい一層改善を加えて発展させてゆき、来年のエコ教室を「新装開店」することを約束した。

また、エコロジー教育センターと GNC の 2 人の親から生まれた子供とも言える「エコロジー植物園」を GNC は引き続き支援し、より一層充実した内容とし、今以上に環境教育の象徴的存在としてゆくことを約束した。現在でも地元の方々から愛されていて、日常的に地元の方々の憩いの場になっている。完全にまちの中の公園として「エコロジー植物園」は認知されるようになっていく。これは GNC が最も望んでいた姿であり、最も嬉しいことである。エコロジー教育センターを出たのは 18 時 10 分過ぎ。



バトツェツェグ校長、ノヨさんと



バトツェツェグ校長



市民の憩いの場になっている



メインの通りに向けた看板

今回のツアーメンバー



セレンゲ県に出発する朝



サラさん



ノムナさん



小川安里さん



宮木いっぺい代表